
ベン・トー丸富ルート（仮題）

利怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー丸富ルート（仮題）

【Nコード】

N0434Y

【作者名】

利伶

【あらすじ】

丸富ルートとは銘打っていますが、佐藤が通うのは烏田高校です。こう、フラグ的な意味での丸富ルート
てか、佐藤と著我をもっといちゃこら（死語）させたかったんだ

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、敗北主義者……」

二月も末、とある一軒家の一室に二人の男女　いや、年の頃を考
えれば少年と少女がテレビ画面と濃いグレーのボディを持ったゲー
ムハードを前に、コントローラーを持って肩を並べてその部屋の主
のものであるベッドに腰を下ろす。

方や黒い髪に黒い瞳、体の線はやや細めだが造形はこれといって特
徴もなければ覇気も無い平均的な今時の日本人の少年と、方やボサ
ボサながらも従弟である隣の少年がよく形容する偽物のような鮮や
かな金髪と碧眼というイタリア人の母が持つ遺伝子を強く受け継い
だ少女。

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、
敗北主義者……」

視線はそのままに、彼女が続けざまに、搾り出すように繰り出す
罵倒を佐藤と呼ばれた『彼』は困った顔をしながらも甘んじて受け
る。

それが彼に唯一できる謝罪の形だった。

ゲーム画面を見ながら、『彼』は床に投げ捨てられるように転が
っているそれを視界の端に収める。それは一通の封筒。そしてその
中に納められているのは烏田高校の入学試験の合格を旨とする数枚
の書類。

これこそが、彼女が荒れている理由だ。

それはとある一件で露呈したあまりよろしくない生活態度によつ
て、彼が当初予定していた某友人の犠牲によって得た推薦入試枠が
ふいになつてしまつて少女と共に丸富大学付属高校に一般試験で挑
むも彼のみが不合格。そのため後日行われた烏田高校の一般入試を
滑り止めとして受けたものの、私立と公立の試験日程の違いゆえ烏

田高校の一般入試日は丸富大学付属高校の二次募集の試験の日付とブッキングしており、彼はより狭き門となった二次募集より若干ランクは下がる故に安パイである烏田高校の試験を受けこれに合格。だがこの判断に声を荒げたのがこの少女。

てつきり自分と同じ学校に行く為に再び丸富を受けたと思っていた彼女は、この合格通知を見て今のように罵倒を繰り返している。

うーん、どうしたものか。

従姉である著莪の罵倒を受けながら僕はほとほと困惑していた。

丸富を落ちた時も散々罵倒……主にバカにする方向で受けていたが、今回のそれは違う。なんというか、本当に腹を立てているのと同時にどこか泣き出しそうな響きがある。著莪道15年と10ヶ月強の僕ならそれがわかる。

だけど、その理由がまったく分からない。高校受験に成功したことから、例え僕持ちであろうとお祝いで豪遊しようなどと著莪なりに祝ってくれると思ったのだが、返ってきたのは絶え間ない罵倒の言葉。

一度は胸倉を掴んでものすごい剣幕で怒鳴ってきたが、それでも帰らないのは合格を告げたのが僕らがゲームをしながらだったからか、ゲーマーとして途中でゲームを放棄することが出来ないゆえか……かく言ううちの親父もかつて……いや、この話は今はどうでもいい。

とにかくなんで怒っているのかわからないと謝りようがないので素直にそれを聞いてみる。

「なあ著莪、何でそんなに怒ってるんだよ」

「なんでって……」

そう一度絶句しながら著我は、なにこいつバカな事言ってるんだ？いや、バカだったか。見たいな顔をしてこっちを見てくる。バカは貴様だ、ゲーム中によそ見るなよ、ほら一機死んだ。

「だってあんた、別々の学校で……それに寮に入るつもりなんですよ？」

たしかに著我の言う通りだが、丸富と烏田はその気になれば徒歩で行き来できる距離だし僕が一人暮らしをしたいと言っていたのも丸富を落ちる前からのことだ、それこそ今更なのに、それらがまるで人生の岐路のような、もう二度と交わることはない道に立ったかのように悲壮な表情をして怒るんだ。

だから、本当にわからない。著我が何故そんなに怒るのか。住む場所が離れて学校が違うだけで何が変わるんだよ。その事を僕は正直に口に出す。こういう時は多少たどどしくても下手に言葉を飾るより著我には通じるはずだ。

「……………」

その問いに、思っていたような畳み掛ける反論が無い。

どうしたことかと著我を窺い見たら、著我に椅子代わりにしていたベッドに押し倒された。

「ちょ、馬鹿お前なにしゃがる!!!」

先程とは代わって今度は僕が著我に怒鳴りつける番だ。

正直著我に押し倒されたことなんてどうでもいい。これがクラスのマドンナである広部さんならまだしも著我なら……フツ。ってそうじゃない、コイツせつかくマッスル刑……じゃなかった、ダイナ

マイト刑事だ。いかん、まさかこの僕がセガハードのソフトの名前を間違えるなんて、変な電波が混信したか？いや、著莪の態度のギヤップに思いのほか驚いたのか？つていやいや今はそんなことどうでもいい。せつかくもうすぐ最終ステージだったのに電源を切りやがって！

「別に、ちょっとこうしたかっただけ」

そう言った著莪の声と、僕の顔のすぐ隣にある横顔は喜色に満ちていて僕はなおも続けようと思った追求の言葉を飲み込む。

「あ、でも」

両腕を伸ばして上体だけを上げて顔を覗き込んでくる。

「丸富行かなかった罰は、ちゃんと受けてもらうんだからね」

罰つてなんだ。僕は高校浪人しなくなかったただけだぞ。

で結局はというと、著莪にあることを約束させられた。

それは著莪と学校近くのマンションでルームシェアすること。元々僕は実家から離れられればそれでよかったのだが、著莪が言う場所はどこらかといえれば丸富に近い立地で当然寮に入ると比べればずっと距離は開いてしまうのだが、未だによく理由はわからないが著莪が懸念していた離れて暮らすという問題が解決してそれでありつつが納得するならばと、了承した。

「この、佐藤のバカ、バカ、落伍者、成績不良、底辺、負け犬、敗北主義者……」

女の子と同棲するのになら目線で妥協する佐藤さんマジパネエ

感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434y/>

ベン・トー丸富ルート（仮題）

2011年10月30日04時31分発行